

門子の軍隊は、城子溝の軍隊はどうなつたろうか……。恐らくソ連軍と激戦をしているに違いない。南方に移動されたと聞いておりまじただけに、残された兵力では、とても太刀打ちはできないだろうと考えると夜もおちおち眠ることができませんでした。そして長年にわたり苦勞された開拓団の皆さんはどうされたであろうか。

僅か三年でありましたが、毎日叩かれながら、寒さに震えながらも過ごした北満警備のことが次々と思い出され、ソ連軍と戦っている日本軍のことが他人事のように思えず、どうぞ被害が軽微でありますようにと、祈らずにはおれませんでした。

日ソ不可侵条約を結びながら、一方的にこれを破棄し、満州に雪崩れ込んだソ連に対し、激しい憤りを感じました。

昭和十六年十二月八日、大東亜戦争が始まって以来、南方に中国に北辺にと、各地で敗戦を聞く度に、再び召集令状を頂戴し、軍人として御国の

ためにお役に立ちたいと毎日念願して、待ち受けていた自分が戦友たちに申し訳ない気持で、終戦の詔勅に涙を流しました。

戦争は二度とあつてはならない。五十七年前の悲劇を繰り返してはならないと深く心に刻んでおります。

昭和十四年四月二十九日（昔の天長節）に勲八等を受章しました。勲章を眺めながら、これを唯一の誇りとし、余生を世のため、人のために尽くす決意で毎日を過ごしております。

満ソ国境異常なし

福岡県 堤 繁 人

福岡県三潴郡三潴町に榮次を父とし、タネを母とし、大正八（一九一九）年に生まれた。男三人、女四人の七人兄弟の長男だったので、大塚尋常高等小学校を卒業後は家業の農業の手伝いをし

た。

当時は満州から中国大陸へと戦線が拡大し、出征兵士を送る日も増えてきた。私もいつかこの日の来るのを覚悟して青年学校へ入り、心身を鍛え、鍛錬に鍛錬を重ねた。

青年学校を終了後、農業に従事するかたわら後輩の指導に当たった。

昭和十五（一九四〇）年三月四日、臨時召集のため歩兵第四十八連隊留守隊に応召し、同日第四中隊の留守隊に入隊となった。

七月十日「軍令陸乙第二十二号」により、同年八月一日、西部第四十八部隊中原隊に編入された。

九月 四日 一等兵に進級。

九月三十日 召集解除になった。

召集解除までの初年兵教育が大変で、九州一の部隊になるのだと、訓練につぐ訓練で、夜も昼もなく、青年学校での教育とは大分異なっていた。

この初期教育が、再度の召集の満州の軍隊生活

で大いに役立ったと今でも信じている。召集解除後、帰郷、農業に専念し、食糧増産に励んだ。また青年学校で後輩の教育と体育に力を尽くし、後顧の憂いがないよう努力した。

昭和十六年七月、再度の応召を受け、久留米西部第四十八部隊に入隊し、同月同日、満州第三百六部隊（歩兵第四十八連隊）に編入された。

七月二十八日「軍令陸甲第三十五号」により臨時編成「甲」が下令され、八月四日編成が完結した。

七月二十七日、満州派遣のため門司港を出発した。七月三十日釜山港に上陸し、八月三日、牡丹江省東寧県城子溝に到着した。満州第三百六部隊（伊東隊）に編入され、同地の警備についた。

玄界灘を越える時も時化にあった覚えもなく、三昼夜かかった鉄路輸送も、そんなに苦痛でもなく、山林に樹木が少なく、田畑も内地ほど手入れされていないなど、余裕をもって風景を視ることができた。

東寧県城子溝に警備中は、十月二十七日から昭和十七年一月十四日までの間に冬期討伐に参加した。討伐と言っても正規軍でなく、土匪の類で日本軍の敵ではなかった。

警備中、最も困難を極めたのは飲料水の確保だった。生水は飲めないのは勿論、水や湧き水を求めて、一キロ、二キロ離れたところまで、数人で水運びを毎日行つた。治安も比較的よいところなので、水運搬の途中に襲撃されることもなかった。

主食も内地ほどではなかったが、本部から定糧が支給になり、現地調達という無理算段を犯すことはなかった。それが比較的治安が良かった原因だと思う。

討伐の合間をみて、対ソ戦に備えて、猛訓練の毎日だった。張鼓峰・ノモンハン両事件の後、満ソ国境は比較的平穏であった。百万の関東軍健在ならば「意気、天を衝く」ものがあつた。われらあれば「満ソ国境異常なし」と意気ごんだ。

日常生活で一番困つたことは先に述べた通り、飲み水の確保であつたが、その次は新鮮な野菜の入手である。また健康上一番注意を要したのは凍傷にかからぬことだった。ちよつとした油断が指の切断となるのだ。注意の上にも注意を重ねた。

日曜日は近くには部落もなく、映画館もない。酒保で酒か甘い物を買つて食べるしかない。自然と貯金が増えたが使い途がなく、残高を見せあつて苦笑いしたものである。

昭和十七年一月三十日、冬期討伐終了後、盲腸炎のため東寧第一陸軍病院に入院したが、二月に退院ができ、部隊に復帰し、軍務に戻つた。

二月 四日～三月十二日 病院地区警備

三月十二日～七月 三日 六〇五高地警備

四月三十日～八月十九日 六〇五高地附近の警備

備

七月二十日 上等兵に進級した。

十一月二十七日、転属のため東寧県城子溝へ向けて出発する。同月二十八日、鮮満国境を通過

し、同日付で西部第四十八部隊に転属になった。

十二月二日博多港に上陸、同日、西部第四十八部隊に着いた。

昭和十八年十二月九日、兵長に進級する。

同月十日、召集解除になった。

帰郷後は家業の農業に復帰して食糧増産に励んだ。

大東亜戦争も既に始まり、いつ召集がきてもよいように心の準備をしていたが、召集のないまま、八月十五日を迎えた。

緒戦の破竹の勢いがいつか、守りの姿勢になり、玉砕につぐ玉砕で、本土決戦、一億玉砕まで追いつめられ原爆投下により終戦になった。

今でこそ言えるが、満州の精鋭百万の関東軍は根こそぎ、南方の激戦地に転属になり、満州にはソ連に対抗できる軍隊はなかったのである。

ナチスドイツ軍を倒したソ連軍は、八月六日、日ソ中立条約を一方的に破棄し、怒濤の進撃で満州を侵略した。その結果、六十万のシベリア抑留

者、引揚者、戦災孤児等の問題が未だに解決しないで残っている。

私と一緒に入営した初年兵の大部分は北支にわたり、転戦につぐ転戦で音信不通の人が多い満州から僅か三年で帰国し、召集解除になり、そのまま終戦を迎えた人は少ない。運がよかったというのか、私にもわからない。

戦後は混乱と多難な社会情勢下で食糧増産と供出遂行に率先し、日本復興の一翼を荷った。その後も農業の機械化と合理化に取り組み、郷土の発展に寄与したと自負している。

昭和二十一年二月、良縁を得て結婚し、二人の男の子に恵まれた。現在次男夫妻と同居している。

農業委員、消防団分団長、青年団長、三瀨町営営圃場整備事業役員、筑後川土地改良役員、PTA役員等地域の役員を務めてきたが、現在は、家内と盆栽造りやカラオケを楽しみ平和な毎日をごしている。